

サヘル・ローズさん講演会特別号！

—自分を信じ、信じられることから得るもの—



高校生の質問に答えるサヘル・ローズさん(右)

1月27日(木)、メッセナホールで信州岩波講座・高校生編が開催された。第21回目となる今回は、イラン出身の俳優、サヘル・ローズさん(36)と東京リガ「出会いこそ、生きる力」と題して講演した。須坂市内の3つの高校の1・2年生、1200名のために語ってくださったが接続トラブルのために見る人ができなかった人も多かったようだ。そのような人たちのためにも、講演から約2か月前が経った今、もう一度思い出してみようと思う。(講演の要旨を見たい人は下3段参照)

令和4年 特別号 新聞委員長

自分の「可能性」を
信じて

講演会終了後、私はサヘルさんに取材させていただいた。自分の中で印象に残ったのは、「私の高校には大に行った方がいいみたいなの雰囲気がある(と思ってる)んですけど、その中には何のために大学に進学すればいいのか、大学に行く意味を見出せなくて悩んでいる人もいて、そういう高校生に向けてメッセージをお願いします」という要望に対する返答だった。

それは、「模索していることとか、心に嘘つかないで生きていいから。進学することを目標にするんじゃないか、自分は何か一番したいのか。無理して結果のために生きるんじゃないか、自分の可能性を信じてね、って伝えたいです」とおっしゃってくださったことだ。この「自分の可能性を信じる」という言葉。サヘルさんの著書の「支える、支えられる、支え合う」にも「生き甲斐を見つけれられるかどうかは、『自分にも可能性がある』と本人が思えるかどうか」と書かれていた。



委員の取材にも丁寧に答えてくださいました

また、サヘルさんは返答される際に、私が言葉をメモしていると、私を見て答えてくださった。直接講演を聞いただけでも圧倒されたのに、間近で訴えかける真つすぐな彼女の瞳は、私たちに「伝えたい」という思いであふれていた。

以下、講演会の要旨を紹介する。

◇

私はイラン・イラク戦争の時代に、イランで生まれました。多くの人が親や住む場所を失い、私も4歳から戦争孤児として孤児院で生活しました。7歳で今の養母と親子になりました。8歳で来日しました。

日本で暮らし始めて一時期、公園で路上生活をしたこともありましたが、でも、地域には食べ物分けしてくれる人がいたりして、多くの人に会い、支えてもらいました。学校の給食のおばちゃん、私と母を家に置いてくれた。ビザ取得のための弁護士費用も出し、保証人にもなってくれました。そのとき、「信じているから」という言葉をもらいました。すぐうれしかった。私も母も「この人を裏切れない。だからこそちゃんとした人として生きたい」と思えた瞬間でした。

間でした。でも、中学時代はとて苦しかった。当時、イラン人の逮捕など、悪いニュースで母国の名前が出ていました。同級生に「捕まったの、おまえの親だろ」などと冗談交じりに国を否定され、親のことをばかにされました。いじめはその後でもエスカレート。自殺を考えて学校を早退した日、家に帰ると母が泣いていました。いつも笑顔で強いイメージじゃない母。弱々しい姿は衝撃的でした。どうしたのかと聞くと「疲れた。生きているのがしんどい」。母の苦しみを聞き、私は初めて本音で対話できました。「私も苦しい。死にたくて帰ってきたんだ」と。母を抱きしめると、骨と皮だけ。昔はきれいだった手も必死に働き続けてぼろぼろになりました。「いっていいよ。年をとって当たり前、育ててもらって当たり前」ではない。出会ったことも育ててもらったことも奇跡。生きるってすごいことなんだと気付きました。

今は少いので、自分の顔や本名を出さずに言葉を自由に発信できますよね。誰かを傷つける言葉を並べることが簡単にできてしまいます。だから、今自分が発する言葉を3秒だけでもいいので考えてから発信してほしい。自分が言われたらどんな気持ちになるか、と。

いじめによるトラウマはいまだに消えないし、高校に入るときも人が怖かった。でも国語の先生が「もっと自分を出していい」と言ってくれました。授業以外でも勉強を教えることで大学に合格することもできました。人は信じてもらえただけでエネルギーが湧き出てくる。そして、自分の置かれている状況はいくらでも改善できるというのを知っておいてほしいです。